

ポストコロニアル的視点から語られる アイデンティティ： 質的異文化コミュニケーション研究の動向

鳥 越 千 絵

1. はじめに

異文化コミュニケーションの英語表記は“intercultural communication”であり、厳密な日本語訳をするならば、異文化「間」コミュニケーションと表記されるべきものである。しかし、この「間 (inter)」という概念は、異文化コミュニケーション学が誕生して間もないころの面影、もしくは歴史の遺物と呼べるものであり、異文化コミュニケーション研究は必ずしも異文化「間」コミュニケーション研究ではないと主張する研究者も少なくない (Collier, 2000; Halualani, Mendoza & Drzewiecka, 2009)。事実、近年の質的異文化コミュニケーション学において、異なる文化背景を持つ者たちの「間」で起こる相互交流に焦点を当て、文化とコミュニケーションを分析可能な実体として捉える研究は少なくなってきた。

異文化コミュニケーション学の原点だとされる、エドワード・ホールの著書『沈黙の言葉』(The Silent Language) (Hall, 1959) の出版から約半世紀が過ぎ、コミュニケーション学という学術領域において、異文化コミュニケーション学は学術分野としての地位を着実に築いてきた。どの分野にも当てはまることだが、学術分野が発展するためにはパラダイムの多様化を避けることはできない (Hall, 1996; Starosta & Chen, 2003; Starosta & Chen, 2005)。異文化コミュニケーション学にも複数のパラダイムが存在し、互いがせめぎ合い、知識の創造

という点においてのパワー均衡が学術的対話の中で構築され続けている (Collier, Hegde, Lee, Nakayama & Yep, 2001)。

コミュニケーション学のパラダイムは、主に社会科学のおよび機能主義的パラダイム、解釈主義的および社会構成主義的パラダイム、そして批判的パラダイムの三つに分けられることが多いが (Martin & Nakayama, 2007; Starosta & Chen, 2005; Ting-Toomey, 2010)、この三つの理論的枠組みが中立的に共存していたことはおそらくないだろう。まだ長いとは言えない異文化コミュニケーション学の歴史のなかでも、これら三つのパラダイムのせめぎ合いは、それぞれに「文化」、「異文化」、「文化とコミュニケーションの関係」を定義付けようとする学術的ディスコースとして表れている。

そして、2000年以降の資本や人的交流、テクノロジーなどあらゆるもののグローバル化に象徴される変化の時代のなかで異文化コミュニケーション学を再定義しようという一連の学術的ディスコースを、研究者たちは“the fifth moment” (Denzin & Lincoln, 2003)、“A ferment in intercultural communication” (Starosta & Chen, 2003)、“a shift of paradigms” (Starosta & Chen, 2005)、“A ‘critical’ juncture” (Halualani et al., 2009) と呼んでいる。このように、異文化コミュニケーション学において過去約10年間は成熟過程の一つの節目として認識されている。現在異文化コミュニケーション学が直面しているのは、「クリティカル」な転換期、すなわち「重要な」岐路であり、「批判的」パラダイムへの方向転換なのである。

本稿では、近年の異文化コミュニケーション研究、特に質的異文化コミュニケーション研究の動向を理論的枠組みの変遷の中に位置づけ再考する。また近年の移民・ディアスポラのアイデンティティー研究が示唆する、異文化コミュニケーション学とポストコロニアル研究との融合について考察する。

2. 異文化コミュニケーション研究におけるパラダイムの変遷

異文化コミュニケーション学におけるパラダイムの差が顕著に表れるのは、それぞれが掲げる「文化」と「異文化」の定義の違いであろう。上に挙げた三つのパラダイムにおける文化とコミュニケーションの存在論、認識論の違いに

については多くの文献が存在するため (Guba & Lincoln, 1998; Martin & Nakayama, 2007; Miller, 2002 など) ここで改めて詳しく掘り下げることはしないが、異文化コミュニケーション研究の歴史の中には以下のようなパラダイムの変遷が認識されている¹⁾。

まず、文化とは特定の地域に住む人々が共有するコミュニケーションのスタイルであり、人々のコミュニケーションパターンは文化を反映していると定義した1950年代のエドワード・ホールによる研究を現在の異文化コミュニケーションの原点だとするならば (Leeds-Hurwitz, 1990; Moon, 1996)、それ以来1980年代までの異文化コミュニケーション研究は、社会科学的パラダイムに基づくものが主流であったと考えられる (Starosta & Chen, 2005)。Moon (1996) による異文化コミュニケーション研究の系譜によると、1970年代後半にはこれまで人種や民族、ジェンダーなど様々な形で概念化されていた「文化」がほぼ例外なく国家と同一視され始め、1980年までにはモダニスト的研究の変数として定義されるようになっていく (Moon, 1996)。これは異文化コミュニケーション独自の理論 (Gudykunst, 1985; Gudykunst & Nishida, 1989, Kim & Gudykunst, 1988 など) が展開され始め、客観性や一般化を重んじる etic 的なアプローチが重視されるようになった時期と一致する。Gudykunst や Kim に代表される客観主義的研究においては、文化と国家は相同関係にあるものとして定義され、国籍を同じくする人々が共有する行動パターンに影響を与える本質主義的で静的 (static) な要因として概念化され、量的に分析されることが多かった (Halualani et al., 2009; Moon, 1996)。従って、このパラダイムに基づく異文化「間」コミュニケーション研究とは、異なる国籍を持つ者同士の相互交流に焦点を当てた研究であった。また、二つ以上の国におけるコミュニケーションパターンや法則を分析し、一般化できる予測的な理論の構築や、異文化適応能力の定義などが異文化コミュニケーション研究の目的であった (Bennett, 1998; Martin & Nakayama, 2007; Starosta & Chen, 2003; Ting-Toomey, 2010)。

こういった社会科学研究の文化本質主義に反対する解釈主義や批判主義の動きは1980年代から既に存在していたが (Starosta & Chen, 2005)、異文化コミュニケーションの質的研究において、大きな転換点になったのは1990年代で

ある (Collier, 2001)。90年代はコミュニケーションという学術分野だけではなく、様々な分野において「言語的・コミュニケーション的転機」(linguistic/communicative turn)であったと言われており (Anderson, 1996)、異文化コミュニケーションの分野でも社会構成主義が注目され始めた時期である (Collier, 2001)。これにより、文化本質主義や文化決定論 (cultural determinism) に反論を唱える、より emic 的なアプローチが求められた (Collier, 2001)。このパラダイムでは、文化は特定のスピーチコードであるという考え方や (Carbaugh, 1990; Philipsen, Coutu, & Covarrubias, 2005)、ディスコースを通して構築されるアイデンティティーだと認識された (Collier, 2005)。伝統的コミュニケーション研究が目的とするような一般化できる知識の創造や唯一の現実の検証ではなく、文化特有の知識や複数に存在する現実に焦点を当て、ディスコースがどのような文化や文化的アイデンティティー、そして共有する意味をどのように構成しているかを描写することが研究の中心である (Martin & Nakayama, 2007; Starosta & Chen, 2005)。従って、異文化「間」コミュニケーションの「間」とは、共有の意味付けが行われたり、アイデンティティーが構築されたりする場であり、文化が発露する場でもあるという位置付けである。

このような1990年代を中心に行われた解釈主義および社会構成主義に基づく異文化コミュニケーション研究への主な批判は、その非政治性と歴史を含むマクロレベルコンテクストの欠如であった (Collier et al., 2001; Halualani et al., 2009)。この批判は1990年代終盤以降特に強くなっている (Collier, 2001)。文化やアイデンティティーがどのように構成されるか、という「何」が「どのように」構築されるのかというコミュニケーション過程は描写されていても、「なぜ」そのように構築されるのかという考察が欠けていると批判的パラダイムを支持する研究者は主張する (Collier et al., 2001; Starosta & Chen, 2005)。その批判を受けて、ポストモダン主義、ポスト構造主義、ポストコロニアル理論などに代表される批判的パラダイムを異文化コミュニケーションへ導入しようという学術的対話が盛んになった。この過去約10年の動きを、Mendoza (2005) は「ポスト理論への転換点」と呼んでいる。

批判的パラダイムは解釈主義的パラダイムと同様に、文化やアイデンティ

ティーはディスコースによって構築され、複数の現実があるという認識をしている (Collier, 1998)。しかし、文化やアイデンティティーの構築は中立的ではなく政治性が常に伴うという認識、そしてディスコースを構築する主体は、社会構造が生むパワーの不均衡によって平等なエイジェンシーを与えられていないという前提を持っている点で解釈主義的パラダイムとは異なる (Collier, 2000; Hegde, 1996, 1998)。そのため、このパラダイムを支持する研究者は、ディスコースが位置づけられている歴史的、社会政治的コンテクストをより重視し、抑圧的で階層的な社会構造が生み出す支配的イデオロギーとパワーの不均衡を批判し、それに抵抗するディスコースの構築を通し、より平等な社会への変革を目的としている (Collier, 2000; Martin & Nakayama, 2007)。

異文化コミュニケーションの批判的パラダイムにおいて、文化は“site of struggle” (Martin & Nakayama, 2007) や、“contested discourses” (Collier et al., 2001) であると定義されることが多い。これは抑圧的な社会構造の中で、支配者的ディスコースと被支配者的ディスコースが意味付けをしようとせめぎ合っていることを指している。支配者的ディスコースと被支配者的ディスコースの両方がそれぞれのイデオロギーや現実を構築するが、パワーの不均衡のために社会の「共通認識」や「常識」となるのは支配者的ディスコースであることが多い (van Dijk, 1995)。批判的パラダイムにおいて異文化コミュニケーションとは、こういった抑圧的社会構造に組み込まれた異なる立ち位置を持つグループが構築するディスコースである。したがって、異文化コミュニケーション研究の目的とは、ディスコースが構築する支配的なイデオロギーを暴露したり、抑圧的社会構造が再構築されるシステムを批判したり、周縁化されている集団に抵抗の為のディスコースを与えることなどである。(Shome & Hegde, 2002; Hegde & Shome, 2002)。また、支配者と被支配者という位置付けは単純に二分化されたものではなく、絡み合う複数のコンテクストの中で行われる。そのため、批判的異文化コミュニケーション研究において、伝統的異文化コミュニケーションが焦点を当てる異文化「間」の概念を当てはめることは難しい (Collier, 2000)。あえて「間」という概念を使うとすれば、研究の対象となるのはせめぎ合うディスコースとディスコースとの「間」で生産される抑圧的

なイデオロギーであるということだろう。

ここまで異文化コミュニケーション研究におけるパラダイムの変遷の概略を述べてきた。パラダイムの変遷とは理論的枠組みの絶対的な優劣を決めるものではないが、知識の創造というのは常に政治性を持っているものである。近年では欧米中心のモダニズムを象徴する客観主義的で政治性を持たないパラダイムへのカウンターディスコースとして、批判的パラダイムが異文化コミュニケーション学内での「意味付け」の舵を取り始めている (Collier et al., 2001)。

3. 近年の質的異文化コミュニケーション研究の動向

上述の三つのパラダイムが競合するディスコースとしてそれぞれに「文化」や「異文化」の意味付けを行っていることもあり、「異文化コミュニケーション」研究の定義は明確ではない。現在のコミュニケーション学において、どの研究が異文化コミュニケーション研究で、どの研究がそうではないのかという輪郭は、社会科学的研究が主流であった80年代から90年代前半に比べると随分曖昧になってきている。特に、批判的パラダイムが勢力を増している近年の研究については、「同文化」「異文化間」という括りを目にする機会が減っていると感ずることが多い。

こうした「異文化コミュニケーション」の輪郭の曖昧さを受け、近年の異文化コミュニケーションの動向を考察するにあたり、今回は2005年以降にNCA (National Communication Association) から出版された *International and Intercultural Communication Annual* (以後 *IICA*) と、この後継となる学術雑誌として発行されている *Journal of International and Intercultural Communication* (以後 *JiIC*) で発表されている研究論文を参照した。他雑誌にも異文化コミュニケーション研究は数多く投稿されており、この学術年鑑と雑誌で発表された論文のみが異文化コミュニケーション研究を代表するものだとは言えない。しかし、これらは最大のコミュニケーション学会が発行する異文化コミュニケーションを専門にした代表的なアウトレットであることは間違いないため、近年の研究の動向を探る足掛かりとしてこの二つを選んだ次第である。

これらの年鑑および雑誌の2005年以降の編集者には、William Starosta, Guo-

Ming Chen, Lisa Flores, Mark Orbe, Tom Nakayama など、解釈主義的パラダイムや批判的パラダイム、もしくはその二つを融合した観点を支持する研究者が名前を連ねている。ここに発表されている研究論文は彼らのフィルターを通じたものであるため、ここで取りあげる研究の傾向は偏ったものだと言えるかもしれない。また、あくまでもここでの考察は私個人の視点から行ったものであり、私の主観的なフィルターを通していてもここで述べておきたい。

2005年の *IICA* から2012年8月発行の *JiIC* までには127本の研究論文が発表されている(序文、イントロダクションや総評は除く)。この中で社会科学のパラダイムに基づく異文化コミュニケーション研究と考えられる論文は26本に過ぎなかった。これらの研究の多くが国文化におけるコミュニケーションパターンの検証であり、面子行動や謝罪行動の比較文化的研究および異文化適応研究が中心であった(Kim, Wilson, Anastasiou, Aleman, Oetzel & Lee, 2009; Kim, Kam, Sharkey & Singelis, 2008; Kim & Kim, 2007; Park & Guan, 2009 など)。 *IICA* と *JiIC* のどちらも全てのパラダイムに基づく研究を歓迎すると明示しているが、2005年以降に発表されている研究は、解釈主義的および社会構成主義的パラダイムか、批判的パラダイムに基づく質的研究が大半を占めていることが分かる。なかでも、社会構成主義的パラダイムの研究に批判的パラダイムが重視する歴史的、政治的コンテクストやイデオロギー、ヘゲモニー、ハイブリディティー、エイジェンシーなどの概念を融合させた研究が目立ち、その傾向は特にディアスポラや移民に関する研究に多く見られる。

ディアスポラや移民というテーマは、異文化コミュニケーション学の初期から多く取り上げられているテーマである(Kinefuchi, 2010)。社会科学のパラダイムにおいては、移住先での異文化適応のプロセスや適応能力について盛んに理論化が行われ、(Gao & Gudykunst, 1990; Gudykunst & Kim, 1992; Kim, 1977, 1988, 1990 など)、解釈主義的なパラダイムにおいては、彼らがどのようなアイデンティティーを構築しているかに焦点が当てられている(Pathak, 2008; Young, 2009 など)。近年のディアスポラや移民に関する研究がこれらの研究とどう違うのかを一言で表すならば、マクロレベルのコンテクスト、すなわち歴史や社会構造への焦点の比重が大きくなっていることである。言い換え

ると、彼らがどのようなコミュニケーション行動を取るのかということや、彼らがどのようなアイデンティティーをどのようなコミュニケーション行動を通して構築しているのかということだけではなく、「なぜ」彼らがこのようなコミュニケーションを取るのか、「なぜ」歴史的、社会政治的、または国際的なコンテキストの中で彼らはこのように位置付けをしたりさせられたりしているのか、ということに目を向け始めている (Halualani & Drzewiecka, 2008; Shome & Hegde, 2002)。この動きの一端を担っているのが、ポストコロニアル研究の異文化コミュニケーション研究への影響であろう。

4. 異文化コミュニケーション研究とポストコロニアル研究

ポストコロニアル理論をコミュニケーション研究に取り入れるべきだという主張は、1990年代終盤から目立つようになってきている (Collier, 1998; Moon, 1996; Shome, 1996, 2000)。コミュニケーションの分野においては、レトリックやメディア研究以外でポストコロニアルの観点から研究がなされることは少なかったが (Shome & Hegde, 2002)、2002年には学術雑誌 *Communication Theory* で特集が生まれ、ポストコロニアル研究とコミュニケーション研究がどのように互いの分野の発展に貢献できるという論考がなされた (Halualani & Drzewiecka, 2002; Hegde & Shome, 2002; Shome & Hegde, 2002)。伝統的なポストコロニアル研究が本来研究の対象としてきたものは、植民地化と非植民地化 (decolonization) という複数の国の歴史的かつ政治的關係であることから、伝統的に文化の境界を越えたコミュニケーションに焦点を当ててきた異文化コミュニケーション研究との融合の可能性は高いと言えるだろう。

2001年発行の *IICA* では、異文化コミュニケーション研究に「ポストコロニアル的転換点 (“a postcolonial turn”)」が到来したと記されている (Collier et al., 2001, p.223)。これは研究者たちが植民地支配的なコンテキストに注目し始めたという意味でもあるが、異文化コミュニケーション学全体の流れがこれまでの欧米発祥のモダニズムに基づく知識の創造というディスコースだとすれば、そのモダニズムに対抗するカウンターディスコースによって知識を構築する時がやって来たという意味でもある (Collier et al., 2001)。この章ではまず簡単に

ポストコロニアル研究の概要について述べ、実際に2005年以降に *IICA* と *JICA* で発表された異文化コミュニケーション論文の中で、ポストコロニアル研究の影響を受けていると考えられるディアスポラ・移民のアイデンティティー研究論文をいくつか挙げることにする。

4.1. ポストコロニアル研究

ポストコロニアル研究の最もシンプルな定義とはおそらく、植民地化および非植民地化という歴史的かつ地政学的 (geopolitical) コンテキストにおける問題点の批判と理論化であるだろう (Shome & Hegde, 2002)。インドが英国の植民地統治から独立したころに始まったポストコロニアル研究は、伝統的にはヨーロッパの植民地支配における帝国主義的または国家主義的なディスコースの批判を指していた (Gershenson, 2005; Shome & Hegde, 2002)。エドワード・サイードの『オリエンタリズム』(Said, 1978) やフランツ・ファノン (Fanon, 1952) のアフリカ大陸におけるフランス植民地支配の研究などがこの伝統的ポストコロニアル研究の例にあたる。

西洋の画一化された知識の構造ならびにそれを拡大させる支配的なディスコースを批判することを通し、植民地支配的な社会構造が築く近代性 (modernity) のなかで抑圧された人々の解放を目指すという政治性は、常にポストコロニアル研究の核である (Hegde & Shome, 2002; Shome & Hegde, 2002)。しかし、必ずしもポストコロニアル研究が常に実際の植民地支配と非植民地化というコンテキストを題材にしているわけではない (Shome & Hegde, 2002)。ポストコロニアル研究は他の批判的文化研究同様に、人種、民族、宗教、ジェンダーや性的指向に関わるパワー均衡とその社会構造についても批判を行う。しかし、一つの文化的なグループおよび国という範疇内で理論を展開することの多い他の批判的文化研究とは異なり、ポストコロニアル研究はこれらの問題を歴史的、地政学的、および国際的コンテキストの中に位置づけられた「支配」と「抵抗」のディスコースの衝突として研究するのである (Shome & Hegde, 2002; Gershenson, 2005)。

ポストコロニアル研究が実際の植民地支配以外の支配構造に目を向けている

背景には、時代と共に変化する「植民地化」の定義がある。「植民地化するもの (colonizer)」と「植民地化されるもの (colonized)」という二分化が明確であった頃と比べると、現代のパワー均衡はグローバル化によってより複雑な階層として表出するようになってきた (Shome & Hegde, 2002)。そのため、植民地化は一つの国がもう一方の国を支配することで起こるとは限らず、一つの国内でも植民地的な支配構造やディアスポラが生まれるようになってきている (Shome & Hegde, 2002)。つまり、実際の植民地化の歴史がない国と国の間における移民問題、ディアスポラ、人種差別などの問題も、グローバリゼーションや多文化共存主義 (multiculturalism) という画一化された西洋の近代性に隠された「他者」の拒絶という植民地支配的なディスコースだと捉えることができるのである (Shome & Hegde, 2002)。

このように、ローカルなパワー均衡の問題をも歴史的、地政学的、国際的なコンテキストの中に位置付けて批判することができるポストコロニアル研究であるが、マクロレベルのコンテキストや理論的側面を過度に重視しすぎるために、コミュニケーション的な側面が考慮されていないという批判もある (Shome & Hegde, 2002)。それを補うことができるのがポストコロニアル研究的視座を持つ異文化コミュニケーション研究である。異文化コミュニケーション研究はポストコロニアル研究が必要とするコミュニケーション的側面を補うことができ、ポストコロニアル研究は歴史的及び地政学的な側面を異文化コミュニケーション研究に与えることができる。この二つの研究を融合することは、両分野の発展に貢献することになるのである (Shome & Hegde, 2002; Gershenson, 2005)。

4.2. ポストコロニアル的観点を持つ近年の異文化コミュニケーション研究

ポストコロニアル研究と異文化コミュニケーション研究が共通して持っている関心の一つが、アイデンティティーの問題である (Collier, 1998)。社会科学の異文化コミュニケーションパラダイムにおいては、アイデンティティーはコミュニケーションパターンに影響を与える変数の一つとして概念化されている (Martin & Nakayama, 2007)。解釈主義、社会構成主義的パラダイムにおける

アイデンティティーとは、ディスコースを通して構築されるものであり、個人はコンテクストに応じて複数の交差するアイデンティティーを操作していると考えられている (Martin & Nakayama, 2007)。批判的パラダイム、特にポストコロニアルの理論的枠組み内でのアイデンティティーとは、解釈主義的パラダイムと同様にディスコースにより構成されるものであり、複数が存在すると考えられているが、解釈主義的パラダイムと異なる点は、誰もが平等のエージェンシーを持って自由にアイデンティティーを構築するのではなく、抑圧的社会構造によってその特定の「位置づけ」が可能にされたり、制限されたりすると考えられている点である (Collier, 1998; Collier et al., 2001)。すなわち、このパラダイムにおけるアイデンティティーとは、個人が生まれ持っている所有物でもなければ、自由に操作をすることも許されているわけではない社会的、歴史的、政治的な立ち位置 (positionality) だと考えられている (Collier, 1998; Halualani et al, 2009)。そして、自分や「他者」の位置付けが行われるアイデンティティーのディスコースこそ、パワー均衡が発露する衝突の場なのである (Davis & Harre, 1990; Wetherell & Potter, 1992)。

アイデンティティーに関する異文化コミュニケーション研究では、そのディスコース的構築のプロセスにのみ焦点が当てられることが多かったが、近年の研究では位置付け (positioning) のディスコースの背景にある歴史的かつ政治的なコンテクストや、特定の位置づけを可能にしたり制限したりする抑圧的な社会構造に目を向けたものが増えてきており、そこにはポストコロニアル的な視線があると考えられている (Collier, 1998)。また直接的ではなくとも、周縁化されてきた文化集団の位置付けのディスコースを、それをとりまくマクロレベルコンテクストの中で取りあげること自体が、異文化コミュニケーション学内における植民地支配的な知識の構造に対するポストコロニアル主義的ディスコースになるとも受け取れる (Collier et al., 2001)。

ここからは、2005年以降に *IICA* 及び *JiIC* で発表された異文化コミュニケーションの論文のうち、ポストコロニアルの観点からディアスポラと移民のアイデンティティーや位置付けに関するディスコースに焦点を当てたものをいくつか挙げる。なお、これらの論文の中にはポストコロニアル理論を応用している

ことが明示されているものもあれば、直接的な言及はないが、ポストコロニアル的観点を示唆していると私が判断したものも含まれている。

4.3. ディアスポラおよび移民のアイデンティティーとポストコロニアルディスコース

ポストコロニアル理論は分析における理論的枠組は提供しているが、決まった分析手法は存在しないため、テキスト分析、レトリック批判、エスノグラフィー、ディスコース分析などによる研究がある (Shome & Hegde, 2002)。今回参照したポストコロニアル的観点を持つ研究においても様々な手法が見受けられるが、アイデンティティーに関する研究ではこれまで解釈主義的パラダイムが主流だったこともあり、ディスコース分析が多く採用されているようである。ディスコース分析とは分析の道具でもあり、また理論的認識の枠組みでもあるが、その枠組みの幅はかなり広く、マクロレベルのコンテクストとマイクロレベルのディスコースのそれぞれを重視する度合いでカテゴリー分けされることが多い。(Phillips & Hardy, 2002; Phillips & Jorgensen, 2002)。マクロレベルのコンテクストを重視する批判的パラダイムにおけるディスコース分析に関しては、マクロレベルのコンテクストを全てディスコースの構築プロセスとして捉えるものもあれば (Laclau & Mouffe, 1985)、ディスコース的構築と物質的な社会構造との弁証法的関係を検証するものもある (Fairclough, 1989)。また、対人レベルの会話を中心に分析するとしても、どの程度マクロレベルのコンテクストと関連付けるかによって批判的パラダイム「度合い」のようなものが変わってくるため (van Dijk, 1995; Wetherll & Potter, 1992)、これから挙げる研究においても、批判的パラダイムの「度合い」はそれぞれ異なっている。

4.3.1. アイデンティティー構築とマクロコンテクスト

2005年以降の異文化コミュニケーション研究の中でポストコロニアル研究の影響が特に強く感じられたのが、ヨーロッパ (EU) におけるロマ (Roma) のアイデンティティーに関する研究である (Guillem, 2011; Herakova, 2009)。かつて「ジプシー」と呼ばれ、ヨーロッパ全体の「他者」として差別されてきた

彼らの位置付けは、EU という国境を含むあらゆる境界線を越えた「統一」を定義する中で重要な問題となっている (Guillem, 2011; Herakova, 2009)。

Herakova (2009) は、EU というアイデンティティーの構築とロマのアイデンティティーの構築をその歴史と政治性の中に位置付け、「ロマ」のディスコース的構築が植民地的支配による周縁化を助長していることを批判した。「ロマ」という呼称は、「ジプシー」に代わるより政治的に公正な呼称として 1970 年代にロマによって提唱された呼び名である (Herakova, 2009)。ロマはヨーロッパ全土に居住する人種的、民族的、宗教的に多様な集団であり、彼らのアイデンティティーや位置付けとは、EU、居住する国、そして国境を越えた枠組みという複雑な構造の中で行われ、常に政治性を孕んでいる (Herakova, 2009)。「ロマ」というアイデンティティー構築ディスコースは、国境を越えたハイブリッドなロマの絆の構築という意味ではロマにとってのアクティビズムの場でもある (Herakova, 2009)。しかし、「ロマ」の“transnational” な位置付けやその多様性は、EU の近代性のディスコースの中で埋没し、それが植民地的支配を助長してしまっていると Herakova は批判する。

彼女が指摘する「ロマ」の構築に関する支配的構造のメカニズムがいくつかある。ジプシーからロマへの呼称の変化がヨーロッパのディスコースに定着したのは 1990 年ごろであるが、まず一つ目は、そのプロセスにおいてロマ内の多様性を無視することに加え、アイデンティティーと国家を同一視する近代性のディスコースにより、ロマを独立した政治的な団体として捉え、ヨーロッパの統一を阻む「他者」として周縁化したことである (Herakova, 2009)。もう一つの問題点は、ロマが居住する国家の (nationa) アイデンティティーと“transnational” なロマのアイデンティティーとの間に存在するパワーの不均衡によって、国籍というアイデンティティーのほうが正当化されているということである。Herakova (2009) によると、“transnational” なロマという位置付けをするロマの人々より、ロマでありながらも国籍という位置付けをする者のほうが、社会的流動性 (social mobility) を持っているという。このパワー均衡を生む植民地支配的なディスコースにより、ロマが EU 各国、そして EU という共同体へ同化することが求められ、また彼らが「他者」として位置づけられる

ことでロマの社会的、政治的な周縁化が正当化されていると Herakova (2009) は警告している。このように、彼女の論文はロマのアイデンティティー構築（ロマによるものとロマ以外による位置付けの両方）をロマの歴史、EU 構築の歴史と政治的コンテクストの中に置き、植民地的支配への抵抗であるはずのロマの位置付けが、支配的ディスコースの中では周縁化され、抑圧的な社会構造のディスコースを再生産する機能があることを批判的に考察している。

Heakova (2009) の論文が EU の構築という比較的規模の大きいマクロレベルのディスコースとコンテクストに焦点を当てているのに対し、Guillem (2011) はメディアとパブリックディスコースに焦点を当て、ロマのアイデンティティー構築が持つ政治性を考察している。Guillem (2011) はロマとヨーロッパの歴史に加え、2008 年にイタリアで施行された政令であるマローニ・センサス (Maroni census) をコンテクストとして設定している。マローニ・センサスは、イタリアに住むロマ全員から指紋を採取し、その他の情報と共にデータベース化するという政令である。実際にこの政令による強制退去や自主的な退去により、1500 人ものロマがイタリア外へ移住したという (Guillem, 2011)。Guillem (2011) は、この政令に関するメディアやパブリックディスコースにおけるロマの「マイノリティー」の立ち位置の構築と、差別的な政策策定というマクロコンテクストとの弁証法的関係を論じている。Herakova (2009) と同様に、Guillem (2011) もヨーロッパで主流となっているディスコースによるロマの本質主義的な位置付けが、ヨーロッパにおける彼らの周縁化の原因であると批判している。また、ロマの周縁化は西洋の近代性の一つであるネオリベラルな平等主義のイデオロギーの中で正当化され、差別的な政策が道理にかなったものであるとして構築されていることを問題視している (Guillem, 2011)。

上記の二つの研究は、ヨーロッパにおける植民地主義的支配とその背景にある近代性を批判している。しかし、西洋以外の植民地主義的支配と近代性を批判することも、異文化コミュニケーション学における知識の構築が植民地主義的支配になることを避けるうえでも重要である (Collier et al., 2001; Shome & Hegde, 2002)。その例の一つが Gershenson (2005) の研究である。

Gershenson (2005) は、イスラエルにおけるイスラエル人とロシアからのユ

ダヤ移民のディスコース的關係の考察を通し、ヨーロッパ外でのポストコロニアルな理論構築を行っている。彼女の理論は、伝統的ポストコロニアル研究に見られるような、植民地支配者が被支配者を抑圧すると言う一方的なディスコースのメカニズムではなく、より複雑で流動的な支配の構造を説明している。

Gershenson (2005) は、イスラエルにおける移民の政治性とは、ユダヤ人国家の設立を掲げるシオニズムの中に位置付けられていると主張する。シオニズムがユダヤ人のパレスチナへの移住を正当化し、奨励したことで世界中に散らばるユダヤ人のディアスポラがパレスチナへ移住したが、彼らの間にもパワーバランスが構築されている (Gershenson, 2005)。まず、初期の移民であるヨーロッパ系ユダヤ人であるアシュケナージは、少数ではあるが、文化、政治、経済的にもエリートとなった。その後アジアやアフリカから移住したユダヤ人たちはミズラヒと呼ばれ、マイノリティーとなった。もう一つのグループがソビエト連邦から移住したユダヤ人であり、イスラエルのユダヤ人人口の 15% を占める (Gershenson, 2005)。Gershenson (2005) は、アシュケナージとミズラヒからなるイスラエル人と、ロシア系ユダヤ人との關係をポストコロニアルの視点から考察し、相互的植民地支配と内在的植民地的支配 (mutual and internal colonization) というモデルを提唱している (Gershenson, 2005)。

Gershenson (2005) によるモデルが示しているのは以下のプロセスである。イスラエル人とロシア系ユダヤ人は、両者が植民地支配者であると同時に被支配者でもあるという位置付けをしている。ロシア系ユダヤ人は国際的なコンテキストにおいて植民地支配者という位置付けを持つが、反ユダヤ主義やヨーロッパとの關係においては被支配者的位置付けを行う。一方、イスラエル人はパレスチナ人との關係において支配者であるが、ミズラヒはアシュケナージに支配される側であり、またイスラエル人のロシア文化への劣等感は歴史的に存在する。これらの流動的な位置付けのディスコースは相互的植民地支配構造を生み、同時にお互いがお互いの周縁であるという位置付けも内在化する。それにより彼らの間にある植民地主義的支配構造は、外的な植民地支配者が不在であっても存続すると Gershenson (2005) は主張する²。この理論的な枠組みを応用し、Gershenson (2005) は "Gesher" というロシア語で行われる演劇に関

するメディアのディスコースにおいて、どのようにイスラエル人とロシア系ユダヤ人のアンビバレントなアイデンティティー構築が行われているのかを分析している。このように、Gershenson (2005) はイスラエル人とロシア系ユダヤ人のアイデンティティーのディスコースをポストコロニアル主義の視点から考察しただけでなく、異文化コミュニケーションとポストコロニアル研究の両方に新しいモデルの提示をし、これまでの両分野における知識の創造にポストコロニアル的な視点を与えたと言えるだろう。

4.3.2. アイデンティティー構築とマイクロディスコース

上記の Herakova (2009)、Guillem (2011)、Gershenson (2005) は、歴史、政治、メディアといったマクロレベルのディスコースに主な焦点を当て、ディアスポラおよび移民のアイデンティティー構築を分析しているが、近年の異文化コミュニケーション研究により多くみられるのは、ポストコロニアル的観点を取り入れた、マイクロレベルのディスコースの分析であると考えられる。ここではマイクロレベルとは対人レベルのディスコースや、特定の言葉の使い方や意味付けなどを指し、Halualani & Drewieck (2008)、Halualani (2008)、Drzewicka & Steyn (2012) の研究などがその例である。

Halualani & Drewieck (2008) は、ポーランド人ディアスポラとアメリカ大陸に居住するハワイ人ディアスポラのディスコース的アイデンティティー構築において、共有する祖先や血の繋がりを表すモダニスト的な“descent”という概念を彼らはなぜあえて使うのかという政治性を考察している。国を持たない国家であった歴史が長く、1950年代に共産主義から解放されポーランドと、独立国家からアメリカ合衆国の州になったハワイという全く異なる背景を持った二つの国であるが、Drewieck はベラルーシのメディアや大統領演説の中に、そして Halualani はハワイ人ディアスポラとのインタビューディスコースの中に、ディアスポラのアイデンティティー構築に共通するディスコース的戦略を見出している。それが“descent”という概念を利用することである (Halualani & Drewieck, 2008)。

ポーランドの場合、東ヨーロッパに散在するポーランド人を居住する国に関

ならずポーランド人 (Poles) として構築することは、国境を越えた国家を構築し、これまでの植民地的支配に抵抗するためのアクティビズムのディスコースであるとも考えられるが、その一方で、画一的な「ポーランド人」の構築によりグループ内の多様性が無視され、植民地支配的で国家主義的なディスコースになってしまう危険性があると Halualani & Drzewieck (2008) は指摘している。また、大陸のハワイ人ディアスポラは、「ハワイ人であること」とは住んでいる場所や生まれた国ではなく、祖先がハワイ人であることだという位置付けをしている。これはハワイ本土に住むハワイ人による「アメリカ大陸にいるハワイ人はハワイ人ではない」という周縁化とのせめぎ合いの中で生まれた位置付けのディスコースであり、ハワイ本土で主流のディスコースに対するカウンターディスコースであると Halualani は分析する。しかしそれと同時に、ハワイ人という位置付けは祖先によって決まるというディスコースは、ハワイ人ディアスポラのコンテキストであるアメリカ合衆国との植民地的支配構造の中で「ハワイ人」を位置付けできなくなってしまう危険性を孕んでおり、それは植民地的支配や人種差別の社会構造を再構築することになると指摘している³ (Halualani & Drzewieck, 2008)

このように、Halualani と Drzewieck (2008) はアイデンティティーディスコースの中で使用される “descent” という「概念」が支配的社会構造を再構築する危険性を提示している。その一方で Drzewicka & Steyn (2012) は、南アフリカにおけるポーランド人移民のアイデンティティー研究を通し、「文化」や「アイデンティティー」といったシンボリックな概念だけではなく、「身体」という物質的な要素も植民地的支配制度の再生産に影響を与えていることを忘れてはいけないと警告している。

異文化コミュニケーション研究において、移民やディアスポラのアイデンティティーはホスト国への文化的な同化 (assimilation) を理論的な枠組みとして語られることが多く、彼らが支配構造の中でどのように「他者」として周縁化されるのかを焦点にしたものが多い。Drzewicka & Steyn (2012) の研究が他の多くの移民アイデンティティー研究と異なるのは、ヨーロッパにおいては「他者」として位置づけられることが多いポーランド人が、アパルトヘイト後の

南アフリカにおいて、シンボリックでもあり物質的でもある「ヨーロッパ系白人の身体」をもってどのように支配構造を助長しているかに焦点を当てていることである。南アフリカ在住の33人のポーランド移民にインタビューをしたこの研究は、彼らが白人の身体をもって、「植民地化するもの」側である現地の白人として自分たちを位置づけることにより、経済構造や労働市場といった現地の歴史的・政治的なコンテクストにおける不平等なシステムと、グローバルな白人至上主義という不均衡なパワーシステムの両方が再生産されていることを示している (Drzewicka & Steyn, 2012)。確かに、南アフリカのアパルトヘイトとそれに伴う“White-Only”の移民政策という歴史的・政治的背景において、ポーランド移民のアイデンティティーを文化的同化理論で語ることは難しい。したがって、Drzewicka & Steyn (2012) は、文化的同化に代わる理論的枠組みとして“incorporation”というフレームを提案し、移民がシンボリックに、そして物質的に支配する側としてのアイデンティティーを構築することで、植民地的支配が継続されることを歴史的、社会政治的なコンテクストにおいて指摘している。

4.3.3. 解釈主義、社会構成主義とポストコロニアル理論との融合

ここまでに挙げた移民、ディアスポラのアイデンティティー構築に関する異文化コミュニケーション研究は、その批判的視点とポストコロニアル研究の影響が明白なものが多い。しかし、2005年以降に *IICA* 及び *JiIC* で発表された研究の中には、解釈主義的および社会構成主義的パラダイムに基づいていると明示されながらも、ポストコロニアル研究との融合を暗示しているものがいくつかある。その例が Kinefuchi (2010) と Witteborn (2008) の研究である。

Kinefuchi (2010) は、米国に難民として移住したモンタグナードの“home”に関するディスコースにおけるアイデンティティー構築を、現象学のアプローチから分析している。モンタグナードとはベトナム高地に住む少数民族のことである。ベトナム戦争中アメリカ軍は彼らを雇い、アメリカ軍の味方として北ベトナムと戦わせたが、終戦後ベトナム政府がアメリカ軍についたモンタグナードを迫害したため、1986年以降アメリカへ難民として多く移住するように

なった (Kinefuchi, 2010)。Kinefuchi (2010) は、カリフォルニア北部に住む 12 人のモンタグナードの男性とのインタビューや、モンタグナードを受け入れている ESL の授業を観察し、移民にとって重要な “home” という概念 (Hegde, 1998) が彼らの移住後のディアスポラ的アイデンティティー構築にどう関連しているかを分析している。Kinefuchi (2010) は、従来の異文化適応モデルでは、“home” とは適応するにつれて失うものだと考えられているが、モンタグナードのアイデンティティー構築においては、“home” とは自分が移住の際に残してきたものではなく、適応に不可欠な所属意識として語られていると述べている。

この解釈主義的な研究に批判的な視点を加えているのがこの研究の考察部分である。考察の中で Kinefuchi (2010) は、ディアスポラの研究において、彼らが物質的及びシンボルの制約なしに国際的なスペースの中で自由に動き回っているというモダニスト的な前提を持つべきではなく、移住後には適応を妨げる社会構造的な制約が存在する可能性もあるということを忘れてはいけないと指摘している。現象学という理論的枠組みの中であるが、この研究にはポストコロニアル的視点が暗示されているように感じられる。

Kinefuchi (2010) 同様、Wittborn (2010) の研究にもポストコロニアル研究の影響が示唆されている。Wittborn (2010) は、彼女の研究が社会構成主義に基づいていることを述べており、米国在住のイラク人がイラク戦争に関するディスコースを通してディアスポラ的アイデンティティーをどのように構築するかというプロセスを分析している。テキストとして使用しているのは参与観察 (participant observation) やインタビュー、グループディスカッションなどで得たイラク人のディスコースである。Wittborn (2010) の分析は、イラク人男性が「どのような」アイデンティティーを「どのように」ディスコースの中で構築するかということに焦点を当てており、確かに社会構成主義のパラダイムに基づいた研究である。しかしその一方で、通常はディアスポラとして定義されることのあまりないアメリカ合衆国に住むイラク人を、イラク戦争という国際的、社会的、政治的なコンテクストの中で、抵抗 (resistance) に特徴づけられるディアスポラという政治性を持った位置付けをしている (Wittborn, 2008) という点において、批判的パラダイムの影響を認めることができる。こ

のように、解釈主義的、社会構成主義的パラダイムに基づく研究においても、異文化コミュニケーション研究とポストコロニアル研究の融合の可能性と有用性が示唆されているのである。

5. まとめ

本稿では、批判的パラダイムへの転換期と言われる近年の質的異文化コミュニケーション研究の動向を、これまでのパラダイムの変遷の中に位置付けて再考した。また、過去約7年間に発表された移民およびディアスポラのアイデンティティーについてのコミュニケーション研究をもとに、異文化コミュニケーション研究とポストコロニアル理論の融合について考察した。

移民やディアスポラは、異文化コミュニケーション学の発展当初から現在に至るまでコミュニケーション研究者の関心を集める研究対象であり続けているため、その研究にはパラダイムの変遷が明確に表れていると感じる。パラダイムシフトとは、異なるパラダイムの絶対的な優劣を決めるものではなく、研究分野が変容するコンテキストの中で、より求められている理論的枠組みや、特定の事象をより時代に合った形で説明できる認識の枠組みを探っていく作業である (Hall, 1996; Starosta & Chen, 2005)。現在ほど様々な面でのグローバル化が進んでおらず、馴染みの無い外国人とのスムーズな交流や受入れへの早急な対処を求められていた時代には、実用的でスキルの向上につながる異文化コミュニケーションの一般化された知識が必要であり、社会科学のパラダイムによる研究がこの点において多大な貢献をしてきた。また、移民やディアスポラを彼らの視点から理解しようとその後の動きに応え、解釈主義的研究はよりローカルな知識の創造に努めた。そしてグローバル化が進み、国境や文化の境界線がより曖昧になり、移民やディアスポラの背景にある歴史的、国際的、政治的なコンテキストの変化がスピードを増し、複雑な階層におけるパワーバランスが彼らの位置づけに影響している現在、彼らを取り巻くマクロレベルのコンテキストとその政治性に焦点をあてることのできる批判的パラダイムが注目されるようになった。今後も世界の変化に合わせて、異文化コミュニケーション学におけるパラダイムのパワー均衡も変化していくことは明らかである。

本稿では批判的パラダイムの中でもポストコロニアル理論の影響に焦点を当てているが、異文化コミュニケーション研究とポストコロニアル研究の融合とは、異文化コミュニケーション研究がポストコロニアル研究の真似をすることではないと考える。前にも述べたことだが、この二つの研究分野は、お互い補い合うことができる可能性を持っている (Shome & Hegde, 2002; Hegde & Shome, 2002)。ポストコロニアル研究のように、マクロレベルのコンテクストの分析を異文化コミュニケーションの視点から行うことももちろん重要なことであるが、ポストコロニアル研究に欠けているといわれるコミュニケーション的側面を補うという意味でも、異文化コミュニケーション研究は、これからよりマイクロレベルのディスコースの分析も行っていくべきではないかと考える (Halualani, 2000)。特に、解釈主義的および社会構成主義的パラダイムの研究が得意とするアイデンティティー構築に関するディスコース分析は、ポストコロニアル研究分野への大きな貢献になるだろう。また、批判的パラダイムとは相容れない理論的前提を持つと考えられがちである社会科学的パラダイムに基づく量的研究も、ディスコースの政治性と歴史的コンテクストの重要性を認識し、植民地支配的ディスコースに抵抗し、社会公正を目指すという姿勢を持ちながら行うことは十分可能である (Mendoza, 2005)。抑圧的社会構造のディスコースを包括的にとらえるためには、複数のパラダイムからの研究が必要であり、そのために不可欠なのがパラダイムを超えた学術的なダイアログである (Collier, 2000)。パラダイムシフトといわれる時期だからこそ、異なるパラダイムを支持する研究者が学術的ダイアログを通してお互いの研究の融合の可能性を模索する機会を得られるのではないだろうか。現在の異文化コミュニケーション学で求められているのは、画一的な研究の在り方や知識の構造というディスコースに対するレジスタンスとなるような、研究者たちの「ポストコロニアル」なディスコースなのである (Collier et al., 2001)。

註

- 1) 異文化コミュニケーションおよび質的コミュニケーション研究における理論的枠組みの変遷に関するより詳しい説明については、Moon (1996) や Denzen & Lincoln (2000) を参照されたい。

- 2) Fanon (1952) もアフリカ大陸におけるフランス植民地支配について、同様の理論を展開している。
- 3) Halualani によるハワイ人ディアスポラのアイデンティティー構築のより解釈主義的な分析については、Halualani (2008) を参照されたい。

参考文献

- Anderson, B. (1996). *Imagined communities: Reflection on the origin and spread of nationalism*. London: Verso.
- Bennet, M. J. (1998). *Basic concepts of intercultural communication: Selected readings*. Yarmouth, ME: Intercultural Press.
- Carbaugh, D. (1990). *Toward a perspective on cultural communication and intercultural contact*. *Semiotica*, 80, 15-35.
- Collier, M. J. (1998). Researching cultural identity: Reconciling interpretive and postcolonial perspectives. *International and Intercultural Communication Annual*, 21, 122-148.
- Collier, M. J. (2000). Constituting cultural difference through discourse: Current research themes of politics, perspectives, and problematic. *International and Intercultural Communication Annual*, 23, 1-25.
- Collier, M. J. (2001). Transforming communication about culture: An introduction. *International and Intercultural Communication Annual*, 24, ix-xix.
- Collier, M. J. (2005). Theorizing cultural identifications: Critical updates and continuing evolution. In W. B. Gudykunst (Ed.), *Theorizing about intercultural communication* (pp.235-256). Thousand Oaks, CA: Sage.
- Collier, M. J., Hegde, R. S., Lee, W., Nakayama, T. K., & Yep, G. A. (2001). Dialogue on the edges: Ferment in communication and culture. *International and Intercultural Communication Annual*, 24, 219-280.
- Davis, B., & Harre, R. (1990). Positioning: the discursive production of selves. *Journal for the Theory of Social Behavior*, 20(1), 43-63
- Denzin, N. K., & Lincoln, Y. S. (2003). *Landscape of qualitative research*. Thousand Oaks, Sage.
- Drzewiecka, J. A., & Steyn, M. (2012). Racial immigrant incorporation: material-symbolic articulation of identities. *Journal of International and Intercultural Communication*, 5 (1), 1-19.
- Fairclough, N. (1989). *Language and Power*. New York: Longman.
- Fanon, F. (1952). *Black skin, white masks*. New York: Grove Press.
- Gao, G., & Gudykunst, W. B. (1990). Uncertainty, anxiety, and adaptation. *International Journal of Intercultural Relations*, 14, 301-317.
- Gershenson, O. (2005). Postcolonial discourse analysis and intercultural communication: Building a new model. *International & Intercultural Communication Annual*, 28,

124-142.

- Guba, E. G., & Lincoln, Y. S. (1998). Competing paradigms in qualitative research. In N. K. Denzin & Y. S. Lincoln (Eds.), *Landscape of qualitative research*. London: Sage.
- Gudykunst, W. B. (1985). A model of uncertainty reduction in intercultural encounters. *Journal of Language and Social Psychology, 4*, 79-98.
- Gudykunst, W. B., & Kim, Y. Y. (1992). *Communicating with strangers: An approach to intercultural communication*. New York: McGraw Hill.
- Gudykunst, W. B., & Nishida, T. (1989). Theoretical perspectives for studying intercultural communication. In M. F. Asante & W. B. Gudykunst (Eds.), *Handbook of international and intercultural communication* (pp.17-46). Newbury Park, CA: Sage.
- Guillem, S. M. (2011). European identity: Across which lines? Defining Europe through public discourse on the Roma. *Journal of International & Intercultural Communication, 4*(1), 23-41.
- Hall, E. T. (1959). *The silent language*. New York: Doubleday.
- Hall, S. (1996). Cultural studies and its theoretical legacies. In D. Morley & K. H. Chen (Eds.), *Stuart Hall: Critical dialogues in cultural studies* (pp.262-275). London: Routledge.
- Halualani, R. T. (2000). Rethinking “ethnicity” as structural-cultural project(s): Notes on the interface between cultural studies and intercultural communication. *International Journal of Intercultural Relations, 24*, 579-602.
- Halualani, R. T. (2008). “Where exactly is the Pacific?”: Global migrations, diasporic movements, and intercultural communication. *Journal of International and Intercultural Communication, 1*(2), 3-22.
- Halualani, R. T., & Drzewiecka, J. A. (2002). The structural-cultural dialectic of diasporic politics. *Communication Theory, 12* (3), 340-366.
- Halualani, R. T., & Drzewiecka, J. A. (2008). Deploying “Descent”: The politics of diasporic belonging and intercultural communication. *International & Intercultural Communication Annual, 31*, 59-90.
- Halualani, R. T., Mendoza, S. L., & Drzewiecka, J. A. (2009). “Critical” junctures in intercultural communication studies: A review. *The Review of Communication, 9*(1), 17-35.
- Hegde, R., & Shome, R. (2002). Postcolonial scholarship—productions and directions: An interview with Gayatri Chakravorty Spivak. *Communication Theory, 12* (3), 271-286.
- Herakova, L. L. (2009). Identity, communication, inclusion: The Roma and (New)Europe. *Journal of International and Intercultural Communication, 2*(4), 279-297.
- Hegde, R. (1996). Narratives of silence: Rethinking gender, agency and power from the communication experiences of battered women in South India. *Communication Studies, 47*, 303-317.

- Hegde, R. (1998). Swinging the trapeze: The negotiation of identity among Asian Indian immigrant women in the United States. In D. V. Tanno & A. Gonzalez (Eds.), *Communication and identity across cultures* (pp.34-55). Thousand Oaks, CA: Sage.
- Hegde, R., & Shome, R. (2002). Postcolonial Scholarship—Productions and Directions: An Interview With Gayatri Chakravorty Spivak. *Communication Theory*, 12(3), 271-287.
- Kim, M., Kam, K. Y., Sharkey, W. F., & Singelis, T. (2008). Deception: Moral transgression or social necessity? : Cultural-relativity of deception motivations and perceptions of deceptive communication. *Journal of International and Intercultural Communication*, 1(2), 23-50.
- Kim, M., Wilson, S. R. , Anastasiou, L., Aleman, C., Oetzel, J., & Lee, H. (2009). The relationship between self-construals, perceived face threats, and facework during the pursuit of influence goals. *Journal of International and Intercultural Communication*, 2(4), 318-343.
- Kim, Y. S., & Kim, Y. Y. (2007). Communication patterns and psychological health in the process of cross-cultural adaptation: A study of American and Korean expatriate workers. *International and Intercultural Communication Annual*, 30, 229-258.
- Kim, Y. Y. (1977). Communication patterns of foreign immigrants in the process of acculturation. *Human Communication Research*, 4, 66-77.
- Kim, Y. Y. (1988). *Communication and cross-cultural adaptation: An integrative theory*. Clevedon, UK: Multilingual Matters.
- Kim, Y. Y. (1990). Communication and adaptation: The case of Asian Pacific refugees in the United States. *Journal of Asian Pacific Communication*, 1, 191-207.
- Kim, Y. Y., & Gudykunst, W. B. (1988). *Theories in intercultural communication*. Newbury Park, CA: Sage.
- Kinefuchi, E. (2010). Finding home in migration: Montagnard refugees and post-migration identity. *Journal of International & Intercultural Communication*, 3(3), 228-248.
- Laclau, E., & Mouffe, C. (1985). *Hegemony and socialist strategy: Towards a radical democratic politics*. London: Verso.
- Leeds-Hurwitz, W. (1990). Notes on the history of intercultural communication: The Foreign Service Institute and the mandate for intercultural training. *Quarterly Journal of Speech*, 76, 262-281.
- Martin, J. N., & Nakayama, T. K. (2007). *Intercultural communication in contexts* (4th ed). New York: McGraw Hill.
- Mendoza, L., (2005). Bridging paradigms: How not to throw out the baby of collective representation with the functionalist bathwater in critical intercultural communication. *International and Intercultural Communication Annual*, 28, 237-256.
- Miller, K. (2002). *Communication theories: perspectives, processes, and contexts*. Boston,

MA: McGraw-Hill.

- Moon, D. (1996). Concepts of "culture": Implications for intercultural communication research. *Communication Quarterly*, 44, 70-84.
- Park, H. S., & Guan, X. (2009). Cross-cultural comparison of verbal and nonverbal strategies of apologizing. *Journal of International and Intercultural Communication*, 2(1), 66-87.
- Pathak, A. A. (2008). Being Indian in the U.S.: Exploring the hyphen as an ethnographic frame. *International and Intercultural Communication Annual*, 31, 175-196.
- Phillips, L., & Hardy, C. (2002). *Discourse analysis: Investigating processes of social construction*. Thousand Oaks, CA: Sage.
- Phillips, L., & Jorgensen, M. W. (2002). *Discourse analysis as theory and method*. Thousand Oaks, CA: Sage.
- Philipsen, G., Coutu, L., & Covarrubias, P. (2005). Speech codes theory: Revisions, and response to criticism. In W. B. Gudykunst (Ed.), *Theorizing about intercultural communication* (pp.55-68). Thousand Oaks, CA: Sage.
- Said, E. W. (1978). *Orientalism*. New York: Random House.
- Shome, R. (1996). Postcolonial interventions in the rhetorical canon: An "Other" vies. *Communication Theory*, 1, 40-59.
- Shome, R. (2000). Media and colonialism: Race, rape, and "Englishness" in *The Jewel in the Crown*. *International and Intercultural Communication Annual*, 23, 135-158.
- Shome, R., & Hegde, R. S. (2002). Postcolonial approaches to communication: Charting the terrain, engaging the intersections. *Communication Theory*, 12(3), 249-270.
- Starosta, W. J., & Chen, G. (2003). "Ferment," an ethic of caring and the corrective power of dialogue. *International and Intercultural Communication Annual*, 26, 3-23.
- Starosta, W. J., & Chen, G. (2005). Where to now for intercultural communication. *International & Intercultural Communication Annual*, 28, 3-13.
- Ting-Toomey, S. (2010). Applying dimensional values in understanding intercultural communication. *Communication Monographs*, 77(2), 169-180.
- van Dijk, T. (1995). Discourse analysis as ideology analysis. In C. Shaffner & A. Wenden (Eds.), *Language and peace* (pp.17-33). Aldershot: Dartmouth Publishing.
- Wetherell, M., & Potter, J. (1992). *Mapping the language of racism: Discourse and the legitimation of exploitation*. New York: Columbia University Press.
- Witteborn, S. (2008). Identity mobilization practices of refugees: The case of Iraqis in the United States and the war in Iraq. *Journal of International and Intercultural Communication*, 1(3), 202-220.
- Young, S. (2009). Half and half: An (auto)ethnography of hybrid identities in a Korean American mother-daughter relationship. *Journal of International and Intercultural Communication*, 2(2), 139-167.